学級集団と児童理解のための アセスメントツール（C-SCT）の開発（2）

○石井雄大（埼玉県公立小学校） 高橋知己（上越教育大学）

キーワード：学級経営，学級集団と児童理解，文章完成法テスト

問題と目的

学級集団や児童の様相を調べる際に使われてきた多くの質問紙調査では， 集団や個人の変容を連続的に捉えることは難しく，さらに実施や分析に時間がかかるため，短い期間で何度も調査するには不向きであると考えられてきた。本研究では石井・品田・高橋（2019）の研究に引き続き，SCT を援用した質問紙調査である学級集団版文章完成法テスト（Classroom- Sentence Completion Test，以下 C-SCT）を用いて学級集団をアセスメントし，個人の認知の変容について考察した。

方　法

調査対象　X 県公立 A 小学校 2 年生 1 クラス 22 名(男子 11 名・女子 11 名)。

調査期間　2018 年 4 月から 2019 年 3 月にかけて 1 年間の縦断的調査を行った。1 週間に 1 度,学級担任により実施された。

調査手続き　品田・高橋(2017)で示された C-SCT の作成手順は以下の通りである。①学級集団の変容を捉える視点を定めるために，「担任教師が望ましいと考える学級の様相（学級を捉える教師の視点）」について調査を行った。因子分析（主因子法，プロマックス回転）にかけ，固有値が 1.0 以上のものを 5 因子抽出し，それぞれ「一体感」「信頼感」「自己表現」「活動意欲」「協働性」と命名した。②上記で示された 5 つの視点から文章完成法テストの刺激文を作成した。作成の際には各視点と刺激文を組み合わせるテストを実施し，一致率は十分であることを確認した。③分析の際には松井(2009)を参考に児童の記述内容を「肯定的表現」「否定的表現」「両価的表現」「無回答・その他」の 4 観点で分け，集団全体の変容と児童の記述内容の変容を追った。表現の分類の際には判定の一致率を求め，妥当性は十分であることを確認した。

結果と考察

特徴的な認知の変容として，①「肯定的表現から否定的表現」②「否定的表現から肯定的表現」③「両価的表現の介在」④「不安定な変容」⑤「第三者的視点の獲得」の 5 つが考察された。①「肯定的表現から否定的表現」は，学校生活に対して次第に否定的な見方をみせてしまう場合である。教師や友人をはじめとした人間関係に不信感を抱く，あるいは行事などの学級集団全体で行う取り組みに対し不満を抱く場合に発生しやすいとみられる。②「否定的表現から肯定的表現」は，学級集団に対して不満を抱いていたものの，時期が経つにつれ見方を好転させる場合である。教師や友人との関わり，行事などの取り組みにより学級集団に対する認知を好転させる場合に発生すると考えられる。③「両価的表現の介在」は肯定的表現と否定的表現が混在した両価的表現から，ある一つ表現に移る場合である。学校生活に対する認知が不安定になっていることが考えられる。④「不安定な変容」は年間を通じて表現の傾向が定まらない場合である。学級集団への適応が図れずに不満を示していることが多く，いわゆる「気になる子供」にあたる場合が多いと思われる。⑤「第三者的視点の獲得」は，自分の想いだけではなく，友人や集団など他者の視点が入る場合にみられる変容である。「できない子をできるようにする」など，学級の友人を助けようとする姿勢がみられた。

引用文献

品田・高橋(2017)「学級集団と児童理解のためのアセスメント方法の試案」日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集 p. 116

石井・品田・高橋(2019)「学級集団と児童理解のためのアセスメントツール（C-SCT）の開発」日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集 p. 597

Table 1　児童の認知の変容（一部抜粋）

視点と刺激文	児童	4月17日	7月9日	9月27日	11月28日	1月11日
信頼感 「クラスのみんなは」	男児A	Xくんのクラスといっしょはいやだ	やさしい	やさしい	Yだけらんぼう	やさしい
視点と刺激文	児童	4月17日	7月9日	9月12日	11月28日	1月11日
活動意欲　全体 「行事のとき　みんなは」	女児B	無回答	がんばっていた	無回答	がんばっていた	無回答
視点と刺激文	児童	5月2日	7月9日	9月27日	11月7日	1月11日
協働性 「協力して」	女児C	できない子をできるようにする	がんばる	たすける	たすける	できないことを乗り越える